



放牧場における牛のデルマトフィルス症の発生事例

岩手県中央家畜保健衛生所

デルマトフィルス症は、*Dermatophilus congolensis* (*D.congolensis*) の感染により、牛、めん羊、山羊、馬等に滲出性皮膚炎を起こす伝染病です。本菌は人にも感染します。感染動物の皮膚には、多数のかさぶた（痂皮）が形成されます。痂皮がはがれて露出した赤い湿潤な表皮には、本菌が多量に含まれ、他の動物が皮膚（損傷部位）から感染します。本症は、湿潤な気候で発生しやすく、病変は顔面、頭頸部、背部、乳頭、乳房間溝等、湿りやすい部位の皮膚に好発し、次第に全身に拡がります。

今夏、県内1公共放牧場において、本病の発生が確認されました。放牧場は、アブやサシバ工、有棘植物など皮膚が損傷しやすい環境であることから、梅雨時期は特に注意が必要です。対策として、発症牛の早期発見・隔離、抗菌剤による治療及び病変部位の殺菌消毒が有効です。

1 発生状況

令和6年7月中旬、県央地域の350頭規模の公共牧場において、放牧牛の頭頸部又は全身に丘疹及び痂皮の形成を主徴とする皮膚病が認められました（図1）。当初、症状が認められた放牧牛は約2割程度でしたが、感染が拡大し、約7割の放牧牛において同様の症状が認められました。

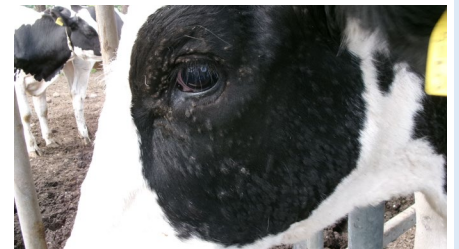


図1 痂皮の形成

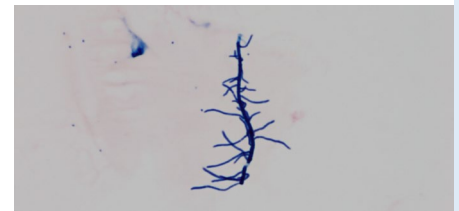


図2 *D.congolensis*

2 検査成績

発症牛10頭中9頭の痂皮から *D.congolensis* が分離されました（図2）。分離菌は、カナマイシン及びストレプトマイシンを除くペニシリン系、セフェム系、アミノグリコシド系、マクロライド系及びテトラサイクリン系の薬剤に広く感受性を示しました。

3 考察

本事例はデルマトフィルス症と診断されました。健康動物の皮膚は毛、皮脂及び角質層に保護されているため、通常は、*D.congolensis* 感染が成立しません。本菌の感染には、湿度や温度などの環境条件のほか、創傷による皮膚の損傷が必要です。また、栄養不足やストレスにより感染が促進されます。本事例における疫学の詳細は不明ですが、保菌牛の入牧がきっかけとなり、①菌が増殖しやすい梅雨の時期であったこと、②アブや有棘植物などで皮膚が損傷した他の放牧牛が多かったこと等が感染拡大の一因と推測されました。

4 対策

一般的に感染性の皮膚病は放置されることが多いですが、早期診断・早期治療が重症化及び牛群内における感染拡大を防ぐ上で重要です。本症は、病変が類似する皮膚糸状菌症と異なり、放置しても自然治癒しません。そのため、重症化や感染拡大を防ぐための対策が必須であり、抗菌剤の全身投与による治療が有効です。痂皮を剥離し、ヨード剤などの消毒薬ですり洗いを行うことで、治癒までの期間が短縮します。本事例では、感染拡大は認められたものの、感受性抗生物質による治療が迅速に行われたことから、短期間で多くの放牧牛が回復し終息に向かいました。

公共牧場における本病流行の予防は、預託元農場における対策（健康観察、放牧馴致等）の徹底により、保菌牛を入牧させないことも重要となります。

※「病性鑑定通信」は、当所で実施している病性鑑定から、今後の診断の参考になる症例、注意喚起等が必要な情報等をまとめたものです。
なお、中央家保ホームページには、過去の記事も掲載しています。
「病性鑑定通信」へのリンクは↓こちら↓です。または、「岩手県中央家畜保健衛生所 病性鑑定通信」で検索してください。
<https://www.pref.iwate.jp/sangyoukoyou/nougyou/desaki/chuuou/1008059/1047433/index.html>